

在日コリアンのエスニシティ表出－地域性との関連に着目して－
Externalization of “Zainichi” Ethnicity : Focus on Regional Characteristics

安本博司 Yasumoto, Hiroshi

大阪府立大学 客員研究員

Osaka Prefecture University, Visiting Researcher

キーワード：在日コリアン、地域性、エスニシティ、潜在化／顕在化

1. はじめに

総務省より多文化共生推進プラン（2006）が出され、多文化共生の重要性が指摘されてきた日本社会において、異なる文化的背景をもつ者同士が互いのエスニシティを大切に、自身のエスニシティに尊厳をもって生きていくことは、多文化共生社会を目指すうえで極めて重要なことである。しかしながら、これまで特定の民族集団への憎悪を表すヘイトスピーチが在日コリアン集住地域で公然とおこなわれ、多文化共生を阻むような事例が数多く報告されてきた。本発表では、エスニシティの顕在化／潜在化を抑制、促進する要因を、地域（在日集住地域を含む大阪市内とその周辺地区）との関連から明らかにする。さらに、彼ら、彼女らが、自らのエスニシティを顕在化させながら生きていくことにおいて、いかなる課題が存在するのかを当事者へのインタビューを通して明らかにする。

2. 先行研究

本発表に関わるこれまでの地域社会学での学術的な研究をレビューすると、エスニシティの顕在－潜在のメカニズムの解明については、『民族関係における結合と分離』（谷富夫編 2002）がある。その研究では、エスニシティの顕在－潜在の要因を地域性（在日集住地域とそうでない地域）との関わりから考察している。その研究の中で、西田（2002）は、生活史インタビューで得られた語りから、エスニシティの顕在と潜在の条件を探っている。そこで明らかになったことは、学校における民族差別はエスニシティを潜在化させること、地域社会におけるエスニシティの顕在と潜在という観点からは、地域における同胞数、日本人との混在の度合いなどによって、生活に民族的な様相が表出されるか否かに違いが生じているということである。一方、集住地以外では、日本人社会における潜在化圧力を受け、民族性の顕在化が抑制された事例を示している。そして西田は、「集住地効果¹」があるとし、どのようなメカニズムで生じるのかを、「下位文化理論²」を手がかりに検討している。具体的には、「臨界量」を超える人口集中と 下位文化間の「接触」の2つから検討しているが、本発表と関わる前者の「臨界量」を見てみると、在日の集住地域ではエスニックネットワークが形成され、エスニック機関の1つとして民族学校が建設、維持され、民族学級・民族教育（民族意識の形成）の促進につながっているという。本発表では、在日コリアンのエスニシティ表出を、地域性との関連から分析する。特に、大阪市外と大阪市内の在日集住地域に目を向け、在日集住地域でのヘイトスピーチなど、あらたな差別言動が若い世代のエスニシティの顕在化/潜在化にどう関わっているのかを明らかにしたい。

3. 調査³概要

本発表では、在日コリアン3名に行ったインタビューとアンケート調査のデータを分析対象とした。

【対象者の属性】

名前	性別	年齢	ルーツ	民族団体経験	民族学校経験	地域	調査日
A(本名)	男	37	朝鮮	有り	有り	東大阪市	2020.10
B(本名)	女	38	日本・朝鮮	有り	無し	寝屋川市	2020.12
C(通名)	女	37	朝鮮	有り	無し	大阪市	2021.3

* ACは在日3世、Bは父が日本人、母が在日2世である。

4. 考察と課題

本発表の対象者の出身地域は、大阪市と、大阪市に隣接、近接する地域であり、なおかつ大阪市生野区などの在日集住地域と関わりを持っている（持っていた）。まずABの共通点は、エスニシティの表出において地域が二次的要因（土台）になっている点である。つまり、一次的には家庭がエスニシティ継承の大きな役目を担い、さらに家庭・親族内での強いエスニックネットワークを通し、エスニック機関へのアクセスが容易になり、民族団体への参加・活動が、自身のエスニシティの顕在化や強化に繋がっている。下位文化理論での言葉を援用すれば、「臨界量」に達した在日の集住地域では、在日の下位文化が形成され、その場が周辺部に住む在日コリアンを引き寄せる「場」となり、その場を通して自身のエスニシティが、より顕在化されている。また、家庭や民族団体で形成された在日としてのアイデンティティは、在日のコミュニティに所属することで大きく揺らぐことはなく、自身のエスニシティもまたヘイトスピーチなどの差別言動によって潜在化されることはない。むしろ、潜在化に影響を及ぼすような社会に問題があるとの認識を持ったり、活動を通して抵抗したりしている。他方Cは、エスニシティの表出は居住地域内にあったエスニック団体でのみ顕在化されていたという意味で、地域性がエスニシティ表出の二次的要因となっているが、他の場所では徹底的に出自を隠している。その要因としては、家庭での親の態度、エスニックネットワークの弱さ、学校経験（教師の差別言動）が考えられる。以上の調査結果から明らかになったことは、調査対象者の家族・親族がもつエスニックネットワークの強弱がエスニック機関へのアクセスの有無とも深く関わり、ひいてはエスニシティの顕在化に影響を及ぼしているのではないかということである。本発表は、事例研究の域に留まっているが、今後は、エスニシティを顕在化/潜在化させている者のサンプルを増やし、地域性との関連を検証し、家族・親族がもつエスニックネットワークにも着目したい。さらには地域性がエスニシティの顕在化の一次的要因になりうる点にも着目し、調査を継続していきたい。

〈注〉

- 1 西田（2002）は、民族を同じくする人々が特定の地域に多数居住することで民族性を表出することが可能となり、同時に、日本人との間にも比較的良好な関係が取り結ばれることを「集住地効果」と呼んでいる。
- 2 フィッシャーの「下位文化理論」は、主に4つの基本命題で構成されている（Fischer1975）。そこで示された、本稿と関わりが強いと思われる命題2は、都市の臨界量に着目し、人口が増大することによって、制度的完備がされ社会的紐帯が維持、促進されるというものである。また、集団関係においては、下位文化同士の対照と紛争が増大し、下位文化の強度が増大するという（＝内集団の凝集力を強める）。
- 3 この調査は、令和2年度学術振興会科学研究費（若手研究）の助成を受けた「エスニシティ継承を可能にするための諸条件の探究」における分析の一部である。

〈参考文献〉

- 西田芳正（2002）「エスニシティのメカニズム」谷富夫編『民族関係における結合と分離－社会的メカニズムを解明する』ミネルヴァ書房:512-540.
- Fischer, Claude S. 1975, Toward a Subcultural Theory of Urbanism, *American Journal of Sociology*, 80(6): 1319-41.
（＝2012 広田康生訳「アーバニズムの下位文化理論に 向かって」森岡清志編『都市空間と都市コミュニティ』日本評論社：127-164）

安本博司 (2019) 『コリア系移住者の民族継承－教育戦略と文化伝達』 ひつじ書房.